

講義『学生生活概論』の教育効果について — 開講方式の変更にもなう影響に着目して —

内野 悌司¹⁾, 高田 純¹⁾, 小島奈々恵¹⁾, 磯部 典子¹⁾
岡本 百合¹⁾, 日山 亨¹⁾, 松山まり子¹⁾, 石原 令子¹⁾
二本松美里¹⁾, 吉原 正治¹⁾

キーワード：教養教育，発達促進，予防教育

A Study on the Educational Effects of "Introduction to Student Wellness":
By focusing on Change of Offered Method.

Teiji UCHINO¹⁾, Jun TKAKA¹⁾, Nanae KOJIMA¹⁾, Noriko ISOBE¹⁾
Yuri OKAMOTO¹⁾, Toru HIYAMA¹⁾, Mariko MATSUYAMA¹⁾, Reiko ISHIHARA¹⁾
Misato NIHONMATSU¹⁾, Masaharu YOSHIHARA¹⁾

Key words: liberal arts, development promotion, preventive education

I. はじめに

保健管理センターでは、2005（平成17）年度より教養教育科目「学生生活概論 ー生き方と暮らし方のヒントー」を開講してきた。この講義の主要な目的は、保健管理センターで行っている相談および診療業務から得た知見を学生に還元し、心身の健康増進や発達を促進すること、および事件・事故、トラブルなどから未然に自身を守ることを意図した教育を行うことである。

同様の取り組みは他大学でも行われており、保健管理センターや学生相談所・室が相談業務だけではなく、教育機能をその役割に加える動きが出てきている（池田・吉武：2006¹⁾，森田・岡本：2006²⁾）。日本学生相談学会発行の「学生相談機関

ガイドライン」(2013)³⁾においても、学生相談機関の役割として、個別の心理的援助に加え、発達促進的、予防教育的役割が明示されている。また、田中（2005）⁴⁾ および福盛・平井・山下（2006）⁵⁾によると、イギリスにおいても、アメリカにおいても、カウンセリング・サービスの活動として、発達促進的な、あるいは予防的なサービスの提供が、重要な役割の一つと考えられている。本講義は、そのような流れの中で心身の健康増進／発達促進的、かつ予防教育的役割を担う正課教育と位置づけられる。

学生生活を送る上では、社会・心理・身体的な問題やトラブルに直面することがしばしばある。そうした事態に直面した時に必要な知識をもっていれば、自分自身で問題を解決していくことがで

1) 広島大学保健管理センター

1) Health Service Center, Hiroshima University

著者連絡先：〒739-8514 広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学保健管理センター

きる。また、自分の力だけでは問題解決できない場合にも、誰かに相談することで、あるいは社会資源を活用することで問題解決を図ることができる。この講義では、学生生活を送る上でのさまざまな問題を想定し、それらに直面した時に自己解決していくための、ヒントとなる知識や技術、考え方を教授すること、さらに大学期における自分づくりを促進することを目的としている。そのため、さまざまなテーマを設定してオムニバス形式で、各回においてセンタースタッフおよび学外講師が講義を行っている。

しかしながら、長年この講義を実施するにあたり、問題点がいくつか認められた。一つ目が毎年、履修希望者が多く、大教室の収容人数540人を定員に抽選を行っており、教室がいっぱいのため学習環境は良くない。たとえば、空調が十分効かないために体調を崩す学生が現れることや、学習意欲の乏しい学生がいて、私語や居眠り、講義以外のことを行うなどがみられ、学生の授業アンケートでは改善すべき点として、毎年指摘を受けてきた。二つ目は受講者が大人数なので、双方向的な授業を行うことが困難であり、学生が主体的・能動的に授業に参加しにくい環境である。三つ目が講義の趣旨から期末試験を実施せず、出席および授業の理解を確認するため、講義終了時の授業レポートおよび期末試験に代わる期末レポートを課してきたが、それだけでは学生の理解度を把握することは難しく、成績評価が適正であるかどうか疑問も残った。また、学生からは単位修得が比較的容易とみなされ、学習意欲の乏しい学生が学習環境を低下させる要因になっていると推察された。四つ目がこの講義を実施する上で担当者の負担が大きかった。つまり、受講する学生にとっても、各回の講師および授業担当者にとってもストレスの高い授業環境となっていた。

そのような状況の中で、本学の学士課程教育における能動的学修（アクティブ・ラーニング）を推進する教育の質向上策の一環として、1クラス当たりの受講者の受け入れ上限に関して一定の基準が設けられることになった。本講義についても教養教育本部との協議を重ね、受講者の受け入れ

上限を250人までとし、受講学生を入れ替えて同じ講義を2コマ連続で実施することにした。毎回の講義に先立ち、Web-CT（オンライン学習支援システム）に講義資料と予習課題をアップロードし、講義に出席する時に資料を印刷し、予習課題の回答とともに持参してもらい、授業終了時に授業中課題と予習課題を提出してもらうことにした。予習課題を課することが従前との変更点である。そして、上記2つの課題の評価（各回5点満点で計65点）と期末試験（35点満点）を実施して、総合的に評価することにしたのが3つ目の変更点である。また、従前通り、15分以上遅刻した者は、欠席と同等の扱いとし、私語や講義に関係のないことをしていた者には警告し、成績評価の際に減点することとした。上記についてシラバスに記載し受講希望者に周知した。

本研究の目的は、本講義の受講者の受け入れ上限を設定すること、予習課題および期末試験を課すなどの講義や成績評価の方式を変更することが、どのような影響を及ぼしたか、また、本講義を学生がどのように認知しているかを検討することである。

II. 方法

分析の対象としたのは、本年度の受講学生の所属や学年、出席回数・率、成績評価の結果、期末の学生による授業アンケートのデータである。授業アンケートは、全講義が終了した7月下旬から8月初旬に実施され、学生が「もみじ」（電子掲示板に相当する情報システム）で自発的に回答したものが集計されたものである。集計等は、修学支援グループが行い、その結果については、講義担当代表者にcsv形式のファイル（プライバシー保護は行われている）で通知され、web上でも公開されて、アンケート結果や学生の自由記述に対し、講義担当代表者がコメントすることになっている。

本研究では、まず授業内容を概括し、つぎに受講生の基本属性について検討した。そして、選択回答方式の質問に対する回答の集計から、学生の授業に対する認知を検討した。さらに、自由記述

回答方式の質問「授業の方法や取り組みで、良いと思ったことを書いてください」および「授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください」、「この授業を受けて、興味をもったこと、自分自身について考えたり、気づいたり、変化があったことなどを差し支えない範囲で具体的に書いてください」に対する回答を先行研究である池田・吉武（2005）の分類を参考にグラウンデッド・セオリーによって、以下の手続きで分析を行い、授業の有効性や課題について検討した。

①記述データを意味内容によってカテゴリーを抽出し、そのテーマ毎にコード化した。②コード化されたテーマから、その類似性によってカテゴリーの統合を行った。

Ⅲ. 結果

1. 講義内容

講義内容は、表1の通りである。

2. 平成25年度講義の受講生

平成25年度の受講生の所属学部および学年別の内訳は、図1の通りである。なお、7、8時限は

受講者の受け入れ上限制限はなく、9、10時限は250人を超えたため抽選が行われ、200人程度が受講できなかった。

所属学部の内訳は、総合科学部3名、文学部10名、教育学部103名、法学部0名、経済学部27名、理学部16名、医学部31名、歯学部0名、薬学部0名、工学部159名、生物生産学部28名である。例年の傾向とそれほど変化はないが、工学部が少し増えている。

学年別の内訳は、1年生323（85.7%）、2年生29（7.7%）、3年生11（2.9%）、4年生14（3.7%）であり、1年生に限れば在学生の13.7%が受講していることになる。例年は受講生がほぼ540人であり、1年生の2割近くが受講していたことと比較すると、人数制限によって1年生の受講生が約100人減ったことになる。

出席については図2の通りで、出席回数（全13回）とその人数の割合が示されている。全出席が244名（64.7%）、1回欠席74名（19.6%）、2回欠席34名（9.0%）、3回欠席8名（2.1%）であり、全受講生の95.5%が入り、履修登録はしたものの1度も出席しなかった9名を含む全体の平均出席

表1 講義のテーマと内容

テーマ	具体的内容
1 オリエンテーション	講義の目的、目標、大学生生活で直面する課題、講義内容のテーマ、成績評価の方法、注意点、ピア・サポート活動について
2 悪質な勧誘から身を守る	カルトとは、その問題点、特徴、勧誘方法、勧誘された時の対処法、元信者の手記
3 セルフヘルプ・グループとは？	どのような活動が行われているか、セルフヘルプグループの機能、SHGを捜す・作るには
4 犯罪に遭わないために	どのような犯罪があるか、具体的な犯罪と防犯、犯罪をなくす社会的取り組み
5 コミュニケーションのとり方	円滑な人間関係を築くために必要なコミュニケーションとは、よりよい話の聞き方、話し方
6 学生生活と消費トラブル	契約とは、どのような消費トラブルがあるか、悪質商法の手口、契約で気をつけること、クーリングオフ
7 健康に過ごすために	大学生がかりやすく気をつけたい身体の病気（感染症など）の症状や対処法
8 ストレスとこころの健康	健康・不健康の考え方、ストレスとストレスラー、ストレスの反応、対処の仕方
9 キャンパスにおけるハラスメント	ハラスメントとは、ハラスメントになる可能性のある行為例、ハラスメントの背景、ハラスメントの被害を受けたら
10 性行動の安全と危険	性感染症（エイズの最新情報、HPVワクチン等）、望まない妊娠（ピル、緊急避妊）、学生の手記
11 アクシデントから身を守る・応急処置	応急手当の重要性、手当の仕方、AEDの扱い方
12 学生期の心の健康とコミュニケーション	学生として、社会人として必要になるコミュニケーションのテーマ、学生のストレスとコミュニケーションの関連
13 ストレスマネジメント	ストレスの原因、具体的な対処法
14 学生生活サイクルと課題	学生生活を通じて直面する課題と自分づくりをめざして
15 期末試験	全テーマから35問（四者択一問題 35点満点）

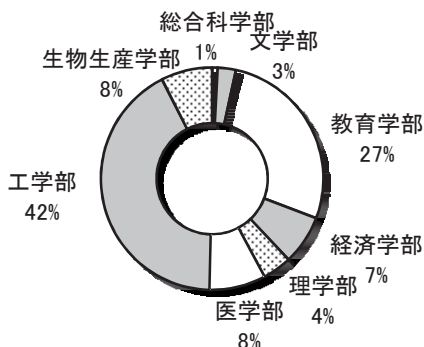


図1-1 受講者の学部別構成

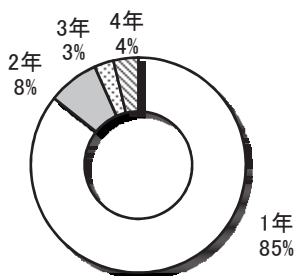


図1-2 受講者の学年別構成

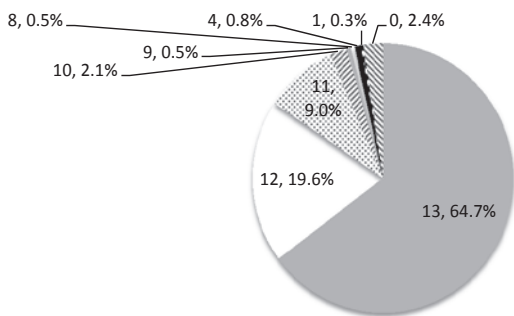


図2 授業出席回数・人数の割合

回数は12.1回となっており、例年と同様の傾向である。

3. 成績評価

成績評価については図3の通りである。平成24年度までと比較ができるように示している。成績の分布は正規分布に近づいてきたものの、S（秀）とD（不可）が減っている。

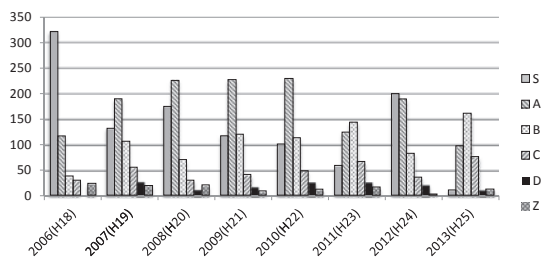


図3 成績分布の経年的変化

4. 期末授業アンケート回答の集計と分析結果

1) 回答者・率

対象受講生337名（7, 8時限130名, 9, 10時限247名）の内208名61.7%（7, 8時限75名57.7%, 9, 10時限133名53.8%）の回答があった。

回答内容については、学生の授業に対する認知にかかる項目を中心に以下で分析結果を示す。

2) 授業の方法や取り組みで良いと思った自由記述回答

「①さまざまな分野の専門家の話を毎回聴くことができ興味をもてた、ためになった」といった内容の16回答。②役に立つ知識を習得できたという14回答。たとえば、「これからの大学生活にいかせるようなことをたくさん知ることができてよかったです」、「身近なことだが意外と知らなかった知識を得られることができたことが良かった」、「学生が抱える様々な悩みや直面するかもしれない危険についての講義はとてもためになった。また、事前課題のおかげでより深く内容を理解できた」という意見、より具体的なもので「自分があることで悩んでいるときにその事柄について学習するので、悩み事を払拭、打開する手助けともなった」、「カルトの授業で学んだことを使うことでカルトに誘われた友達を救うことができました」、「カルトや消費トラブルなどをこの授業で教えてもらったことで、巻き込まれづらくなったと思います」、「自分と向き合い、私生活を見直すきっかけになりました」、「自分の生活態度を再確認する良い機会を与えてくれました」という回答があった。③「パワーポイントを使ったわかりやすい説明」、「プロジェクターとレジユメのプリン

トを使っていたのがよかった」といった授業方法に肯定的な3回答があった。

3) 授業の方法や取り組みで改善すべきと思った自由記述回答

まず、昨年度の改善すべき点で指摘があったのは、30名(複数の内容についての記述あり)で、内容分類別の集計は以下の通りであった。①私語の多さや教室のざわつきのために集中できないこと、受講態度の悪い学生への注意喚起について16回答。②人数の多さとそれによる教室の空調の効かなさなどに対する物理的環境面の改善について6回答。③その一方で、講義担当者が受講態度の悪い学生を注意するなどの管理的態度に対する批判について4回答。④スライドの見えにくさや音声の聞こえにくさ、配布資料の工夫、授業終了時間の遵守についての回答5回答。⑤授業内容の深化や工夫についての4回答。

それに対し、今年度の改善すべき点で指摘があったのは17名(複数の内容についての記述あり)で、内容分類別の集計は以下の通りであった。①授業内容が重複していたり、一般的な知っている内容ばかりであったり、講師によって内容の質に差があったことなどから授業内容の工夫について6回答。②予習課題、レポート提出の負担の大きさについて5回答。たとえば「先生によっては何故その課題を出すのか想像できない課題もあった」、「本や映画に関する課題が出されることがあり、生徒によっては取り組めないものがある」といった意見があった。③試験問題について4回

答。具体的には「授業に対して試験が難しすぎた」、「テストをするのはかまいませんが、そのための復習がレジュメだけでは足りない気がしました」、「試験内容がレジュメに書かれていない。そのため、授業をまじめに聞いていて、なおかつ試験対策をしようと思ったときに、何をしたいのかわからない」といった意見があった。④授業のマネジメントについて3回答。具体的には「見張りの人間をつけたりされてかなり不快だった」、「自宅生はバスの時間にシビアなので、授業終了時の課題を書く時間をしっかり取ってほしいと思った」という意見、「教室はまだまだ余裕があるし、授業を受けたかった人はもっと多いので、熱中症の人が出ない程度にもう少し人数を増やしてもいいと思います」という昨年度までとは逆の意見もみられた。

4) 授業内容に対する評価について

選択回答式の質問に対する回答において、授業評価に関連する項目についての回答結果は、図4のグラフの通りである。全講義共通の質問項目「この授業を履修してよかったと思いますか」に対する肯定的な回答は83.2%であった。

以下で説明する授業担当者がアンケートで設定した質問4項目についても8割から9割が肯定的な回答であった。ただ、「悩みや不安を抱えるとき、保健管理センターに相談に行ってみようと思う」に対する肯定的な回答は64.9%であった。これらの回答の傾向は例年とほぼ同様であった。

「この授業を受けて、興味をもったこと、自分

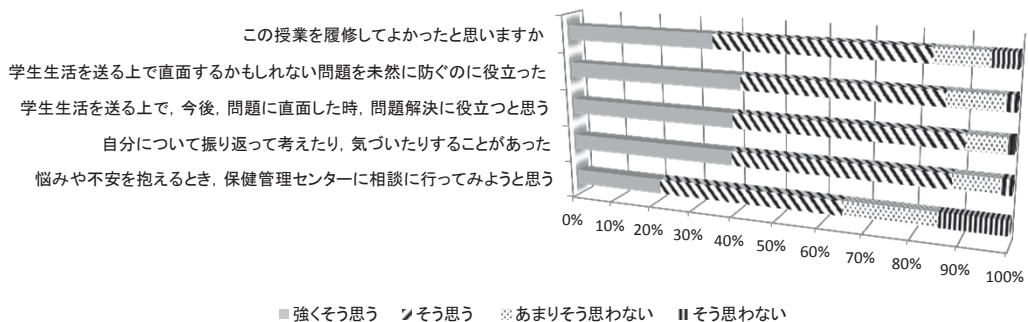


図4 授業評価についての択一式設問に対する回答

自身について考えたり、気づいたり、変化があったことなどを差し支えない範囲で具体的に書いてください」という設問に対する自由記述回答については、表2に示したような3つの大分類と各小分類が抽出された。自由回答は196回答あった。そのうち、小分類の複数に該当する記述もあった。自由記述の分析ため、定量的な分析にはならないが、どの程度の記述があったかの目安を示すため、件数および割合(%)も記した。以下では、自由記述の具体的内容を記す。

表2 自己の内省や気づき、変化についての自由記述

大分類	小分類	小分類件数(%)	大分類件数(%)
知的側面の変化	授業内容への興味・関心	41 (20.9)	94 (48.0)
	知識の獲得・深化	45 (23.0)	
	知識の有用性の認識	8 (4.1)	
自己の振り返り	内省・自覚の促し	9 (4.6)	15 (7.7)
	問題の捉え直し	3 (1.5)	
	自己への気づき	3 (1.5)	
	新たな心構え・姿勢の形成	70 (35.7)	
生活・行動の変化	行動・生活の変化・改善	13 (6.6)	87 (44.4)
	不安の軽減・解消	3 (1.5)	
	被援助行動の促し	2 (1.0)	

(1) 問題の未然防止に役立つことについて

質問項目「学生生活を送る上で直面するかもしれない問題を未然に防ぐのに役立った」に対する肯定的な回答は86.0%であり、自由記述における具体的な内容は以下のようなものがあつた。「自分に合ったストレス解消法を見つけ、うつ病やストレス性の病気を防ぎたい」、「妊娠の危険性など性についても考えるようになった」、「カルトに対する意識が変わりました。ごく普通の人でも、あんな手口を使われたら騙されてしまうな…と思いました」、「悪徳商法に気を付けるようになった」など講義で取り上げたさまざまなテーマについて未然に注意するようになっていた。

(2) 問題に直面した時、問題解決に役立つことについて

質問項目「学生生活を送る上で、今後、問題に直面した時、問題解決に役立つと思う」に対する肯定的な回答は90.2%であり、具体的な自由記述は以下のようなものがあつた。「学生生活を送るうえで気を付けなければならないことや問題が起きた時の対処の仕方がよくわかつた」、「消費者ト

ラブルに巻き込まれないため、また、巻き込まれても適切に対処するために、消費者トラブルに関する十分な知識を得る必要があると感じました」、「慣れない環境でいろいろ不安があつたが、今後に役立つ知識を増やせてよかつた」、「ストレスにどう対処したら良いか、自分なりに考えることができた」などがあつた。さらに実際に役立った体験を記述したものもあつた。たとえば、「人とのかわり方についての考え方も変化が現れました」、「この授業を通し、自分の生活を見直すことで、コミュニケーションなどは改善したと思う」などがあつた。

(3) 自分についての振り返りや気づきについて

質問項目「自分について振り返って考えたり、気づいたりすることがあつた」に対する肯定的な回答は88.0%であり、具体的な自由記述は以下のように3つの小分類に分類された。

①「内省や自覚の促し」の記述として、「様々な授業を受けて、自分のアイデンティティや日常の生活について考え直すことが出来た」、「自分の生活習慣について、考え直そうと思った」などがあつた。

②「問題の捉え直し」の記述として、「人とのコミュニケーションで、自分ではうまくいっていない点について改めて考えることができたし、また同じような悩みを抱えている人はたくさんいたことが知れて、少し安心した」、「自分と同じような考えを持っている人がいるということがわかつてよかつたです」などがあつた。

③「自己への気づき」の記述として、「自分が無知であることに気づけた」、「コミュニケーション時に今まで自分中心で物事をしゃべってばかりいたが、この授業で欠点に分かりました」などがあつた。

(4) 生活や行動の変化について

生活や行動の変化についての具体的な自由記述は、以下のように4つの小分類に分類された。

①「新たな心構え・姿勢の変化」の記述として、「この授業を受けて、まず大切なのは自分自身のケアだということがわかり、自分を大切にしようとして以前より思えるようになりました」、「今までは

コミュニケーションのとり方について意識をしたことなかったが、良いコミュニケーションをできるだけはかろうと思うようになった」、**「学生生活も、ただ毎日を過ごすだけではなく、いろいろ考えたり、大学在学時しかできないことをたくさんやったりしようと考えさせられた」**などがあった。

②**「行動・生活の変化・改善」**の記述として、「自分が大学生活において悩むべきことを授業では解決策の一つを教えてくれ、悩んだりした時には活用できたのでとてもよかった」、**「コミュニケーションするときに授業で教わったことを実践した」**などがあった。

③**「不安の軽減・解消」**の記述として、「大学生活において不安なことがあったが、それを乗り越えられる気がした」、**「自分の学生生活が特別な訳でなく、他の多くの人も同じような悩みをもっていると分かり、悩みなどについて落ち着いて考えられるようになった」**などがあった。

④**相談する行動（被援助行動）**について

質問項目「悩みや不安を抱えるとき、保健管理センターに相談に行ってみようと思う」に対する肯定的な回答は64.9%であり、具体的には「健康上のことなど何か問題をかかえたときに相談ができるところがあるというのをいろいろ知ることができてよかったです」などがあった。

IV. 考 察

1. 出席、授業への取り組みについて

出席率は非常に高いが、これは講義方式変更の前後で変化はない。もともとシラバスおよびオリエンテーションでも説明してあったので、出席と予習および授業中の課題を評価することを重視していることが学生に周知されていることが示唆される。また、課題レポートの回収にはスタッフやTAを配置し、友人が代わりに提出することが難しいため、出席率も高くなっていると推測される。

授業の方法や取り組みについて改善すべき点の自由記述について、昨年度と今年度を比較検討する。昨年度は私語の多さや教室のざわつきが多いことや人の多さのために教室の空調が効かないなどの物理的環境面の指摘が多かった。今年度はそ

ういう意見はまったくなかった。逆に「教室はまだまだ余裕があるし、授業を受けたかった人はもっと多いので、熱中症の人が出ない程度にもう少し人数を増やしてもいいと思います」と受講者受け入れ上限をもっと緩和してもよいという意見があった。私語や授業態度に問題がある学生がないわけではないが、昨年度までと比べて注意をする回数は圧倒的に減っている。

今年度の自由記述では、授業内容についてもっと深化させるべきであるといった意見や講師によって内容の質に差があることなどの指摘が一番多かった。前年度までのネガティブなものを改善すべきという意見から、質を向上させるための建設的な意見が多くなっている。これは能動的学修を推進する意図で行われた今回のような変更と軌を一にしている。受講者は減ったものの、質向上という目的については改善していることが示唆された。

2番目に多かったのは予習課題とレポート提出の負担の大きさであった。これは講義担当者が意図したことでもある。それは受講者受け入れ上限を設けるために、本講義を積極的に受講したい学生が、学習意欲の低い学生の多さのために受講できないことを防ぐためにも課したものである。今年度はその効果があったかどうかはわからないが、次年度からは本講義を受講するのは負担が大きいという学生の噂が伝わると予測され、効果が期待される。また、負担増大の一方で、「事前課題は自分の経験をもとに記述する内容が多かったので、自分が普段気にも留めていなかったことを考えたりして自分の経験や考え方を見直すことができました」という学生の自由記述があるように、単に一般的な知識の獲得をめざしたのではなく、より自分自身に関係することとして捉え、自己への気づきや理解を促すことに役立ったと考えられる。しかしながら、予習課題の位置づけについて講師間で統一性がないので、課題の出し方を工夫してもらうよう講義依頼時に説明する必要がある。

3番目に多かったのは試験問題に関するもので、これは方式を変更した初年度のことであり、

たしかに改善すべき点があったと講義をマネジメントした担当者間でも意見が一致している。学生の意見を真摯に受け止め改善していかなければならない。

また授業のマネジメントに関して、7, 8時限から9, 10時限の学生の入替えのとき、混乱が生じたことや、9, 10時限の終了時間が遅くなったために帰宅に支障を来した学生がいたことへ配慮する必要がある。

授業の方法や取り組みで良いと思った自由記述については、例年通り、さまざまな分野の講師の話がオムニバス形式で聴けること、役に立つ知識が習得できたというものが多い。具体的内容については、前述の結果4の4) 授業内容に対する評価の自由記述に見られる通りである。

2. 成績評価について

成績評価については、成績の分布は正規分布に近づいてきたものの、S (秀) とD (不可) が減っている。これは評価方法を変更して初年度であるため、各回の予習および授業中課題の評価基準が一定していないことと、期末試験の得点が予想よりも低かったことが影響していると考えられる。昨年度まではできるだけ多くの学生に受講してもらい、学生生活および社会に出てから役立つ知識や技術を身につけてもらうこと、自分づくりを促進することを重視して講義を行ってきた。今年度は予習課題および期末試験を課し、成績評価を厳正にし、講義の質の向上をめざしたことも影響していると考えられる。これによって、来年度からの受講希望者には、比較的容易に単位が修得できることよりも興味関心の方が、講義の選択に影響すると予想される。

しかしながら、先に述べた学生の改善すべき自由記述のところで、予習および授業中課題、試験問題にかかわる問題点を指摘されているので、本講義の課題を課す場合に講師にその趣旨を説明し、意思統一するよう努めなければならない。つぎに、レポートの評価基準を明確にし、講師間であまりにも評価に差が生じないように工夫しなければならない。そして、試験問題作成については、

講師間で試験の難易度に差があることや、レジュメや授業で取り上げられていない内容を試験問題にされていることがあったので、講義および試験問題作成を依頼する際に講師間でできるだけ意思統一できるよう働きかけたい。試験問題を想定して、レジュメを作成し授業で取り上げてもらうこと、試験問題の難易度にあまり差が生じないように事前に講師に説明、依頼する必要がある。

3. 授業内容に対する評価から質向上に向けて

肯定的な回答が8割から9割と高かった。ただ、期末の授業アンケートに学生が自発的に回答したものであるから、もともと学習意欲の高い学生が回答した割合が高いと推察され、この結果にはバイアスがかかっていると考える必要がある。それでも肯定的な記述から、講義の質を向上させるための示唆があったので考察する。

通常の講義では一般的な知識を得るだけであったり、知識はあっても自分には関係ないという他人意識をもったりすることが多い中で、本講義ではたとえば「実際につらい経験をした先輩のメッセージを聞いて、しっかりと自分で考えていけなかった時期なんだと改めて感じさせられました」と自由記述にあるように、具体的な事例や先輩の体験談などを講師が取り上げることで、より身近な問題として捉えられていることが示唆された。

また、「応急手当ての必要性を実感し覚えておかなければならないように思った」、「セルフケアグループについて興味を持ちました。同じような悩みを持つ人が集まり、話を聞いたり話したりするだけで、解決への道が開ける。参加するには勇気が必要だと思いましたが、機会があったら積極的に参加したいと思いました」と記述されているように、単なる知識獲得ではなく、授業内容への興味関心から、知識を深化させたり、使えたり実践したりできるようになること、興味をもったことに参加してみたいという意欲の喚起が示唆されていた。

さらに「カルトの勧誘をこの前に受けたが、断ることができた」、「ストレスをためないようにす

る解消法が役に立った」と記述されているように、「獲得した知識の有用性を認識すること」が、さらに学習意欲を高めることが示唆された。

このような工夫が今後とも必要になるだろう。

4. 問題の未然防止および健康増進／発達促進教育としての有効性について

講義を聴いたことを契機に、「自分自身についての振り返り」が行われ、それまで自分のもっていた認識とは別の視点から考えることが可能となっている。その結果、「問題の捉え直し」等が起こり、「自己についての気づき」が得られる効果がみられた。このように講義を受けることで、単に知識が増すというだけではなく、講義内容をより身近な問題として感じ、自分を振り返り、内省や自覚を促す効果があると考えられる。

「自己の振り返り」が行われ、「自己の気づき」が得られた結果、「新たな心構えや態度が形成」されたり、「行動や生活の変化や改善」が生じたり、「不安が低減したり解消」し、自ら解決に向けて行動することや困った時には他者に相談する行動が生じている。

上記のようなカテゴリーの影響関係を示すカテゴリー関係図式を内野・磯部・栗田(2010)⁶⁾を参考に図5に示した。

以上のように、学生生活の中でどのようなトラブルや危険が潜んでいるか、あるいはどのようなことが発達上の課題であるかについて、具体的な知識を獲得したことから、未然にどういうことに気をつけるべきか、実際に問題や困りごとに遭遇したときにどのように対処すればよいかもある程度学んでいる。具体的な解決策が見つからなくても、友だちに相談したり、活用できる社会資源を自分で探したりする行動につながっていると考えられる。

さらに、本研究から得られた知見、すなわち講義に対する学生の感想や講義内容に関連する自分の経験についての記述などは、保健管理センター

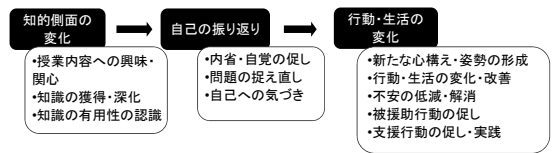


図5 カテゴリー関係図式

へ相談に来ていない学生からのものがほとんどであり、より一般的で普遍的な問題・課題であるといえる。その知見は、日常の相談・支援に活用できるとともに、保護者の相談や日頃から学生と密接にかかわる教職員へのコンサルテーションやFD、SDを通じて還元できるものと考えられる。

文 献

- 1) 池田忠義, 吉武清實: 予防教育としての講義「学生生活概論」の実践とその意義. 学生相談研究, 26: 1-12, 2005.
- 2) 森田裕司, 岡本真雄: 新入生対象の講義「キャンパスライフ実践論」の試み—学生生活全体のサポート. 学生相談研究, 26: 185-197, 2006.
- 3) 日本学生相談学会: 学生相談機関ガイドライン, 2013.
- 4) 田中健夫: 英国学生相談学会による大学とカレッジのカウンセリング・サービスに対するガイドライン—AUCC 大学機関への助言サービス2004—. 学生相談研, 25: 237-258, 2005.
- 5) 福盛英明, 平井達也, 山下聖: CAS・カウンセリングサービス・スタンダードとガイドライン—アメリカ CAS “Bluebook” 2003より—. 学生相談研究, 26: 243-261, 2006.
- 6) 内野悌司, 磯部典子, 栗田智未: 大学キャンパスにおける事件・事故等への危機対応システムに関する臨床心理学的研究, 平成19年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号19530623研究成果報告書, 2010.